

資本論第一巻第一章、最初の商品の分析では、使用価値と価値(交換価値)、それを形成する具体的有用労働と抽象的人間労働を明らかにするが、「価値は労働である」ことの解明は、重商主義、重農主義、古典派経済学の歴史過程で発展してきた。先の対比資料に見るように、経済学批判では、第一章商品と第二章貨幣または単純流通との間に、A商品の分析のための史的考察が入り、上記の解説がされている。

資本論では、この項は省略され剰余価値学説史のなかに移され、第一章 商品、第二章 交換過程、第三章 貨幣または商品流通一として、より精緻に整理され展開される。

商品の価値を理解するうえで、省略された一A商品の分析のための史的考察を一読することも大変有意義であると判断されるので、以下その抜粋を参考に供するものです。

経済学批判 抜粋 (校正済)

アンダーラインは t.t

A 商品の分析の史的考察(抄)

商品を二重の形態の労働に分析すること、使用価値を現実的労働または合目的な生産的活動に、交換価値を労働時間または同等な社会的労働に分析することは、イギリスではウィリアム・ペティに、フランスではポアギュベールに始まり、イギリスではリカードに、フランスではシスモンディに終わる古典派経済学の一世紀半以上にわたる諸研究の批判的最終成果である。

ペティは、労働の創造力が自然によって制約されているということについて思いがいをすることなしに、使用価値を労働に分解している。彼は現実的労働をただちにその社会的総姿態において、分業としてとらえた。素材の富の源泉についてのこの見解は、たとえば彼の同時代人ホブスの場合のように、多かれ少なかれ実を結ばずに終わることなく、彼をみちびいて、経済学が独立の科学として分離した最初の形態である政治算術に到達させた。けれども彼は、交換価値をそれが諸商品の交換過程で現象するままに、貨幣と解し、しかも貨幣そのものを実在する商品、つまり金銀と解した。彼は重金主義の表象にとらわれて、金銀を獲得する特殊な種類の現実的労働を、交換価値を生み出す労働だと説明した。實際上、彼はブルジョア的な労働が生産しなければならないのは、直接的な使用価値ではなく、商品であり、交換過程におけるその外化によって金銀として、すなわち貨幣として、すなわち交換価値として、すなわち対象化された一般的労働として自分をあらわすことのできる使用価値である、と考えた。それはとにかく、彼の例は、労働を素材的富の源泉として認識しても、それはけっして労働が交換価値の源泉となっている一定の社会的形態についての誤解をとりのぞくものではない、ということを適切に示している。

交換価値をはじめ意識的に、ほとんど平板なまでにはっきりと労働時間にまで分析したのは、ブルジョアの生産語関係がその担い手たちと同時に輸入され、歴史的伝統の欠加をおぎなうてなおあまりある沃土をもった地盤のうえに急速に成長した新世界の一人物である。その人とはベンジャミン・フランクリンであって、彼は1719年に書かれて1721年に印刷に付されたその青年時代の労作で、近代的経済学の根本法則を定式化した。彼は貴金属以外に価値の尺度を求めることが必要だ、と断言する。これこそ労働だ、と言う。

* B・フランクリン「著作集」、J・スパークス編、第二巻、ボストン、1836年。「所収、紙幣の性質と必要についての小研究」。

「銀の価値も、他のすべてのものの価値と同様に、労働によって測ることができる。たとえば、ある人は穀物の生産に従事し、他の人は銀を採掘し精錬するものとしよう。一年の終わりがまたは他のある一定期間ののちに、穀物の全生産物と銀の全生産物とは、それぞれの自然価格である。そしてもし一方が20ブッシェルで、他方が20オンスだとすれば、1オンスの銀は1ブッシェルの穀物の生産に用いられた労働の価うちがある。だが、もしもっと近くの、もっと採掘しやすい、もっと豊かな鉱山が発見されたために、ある人が以前に20オンスの銀を生産したのと同じくらい容易に、いまでは40オンスの銀を生産できるものとし、しかも20ブッシェルの穀物の生産にはやはり以前と同じだけの労働が必要だとすれば、2オンスの銀は1ブッシェルの穀物の生産に用いられると同じだけの労働以上の価うちはないであろうし、以前には1オンスの銀の価うちがあった1ブッシェルは、他の事情が同じならば[caeteris paribus]、いまでは2オンスの銀の値打ちがあるであろう。だから一国の富は、その国の住民が買うことのできる労働量によって評価されるべきである。」

フランクリンにあつては、労働時間は、経済学者流儀で一面的にただちに価値の尺度としてあらわされる。現実の生産物の交換価値への転化は自明のことであり、したがって問題は、その価値の大きさを測る尺度を発見することだけである。彼は言う。「商業は一般に労働と労働との交換にほかならないから、すべてのものの価値は、労働によって最も般も正しく評価される。」この場合、労働ということばのかわりに、現実的労働ということばを置き換えるならば、一つの形態の労働と他の形態の労働とが混同されていることが、ただちに発見されるであろう。

商業とは、たとえば靴屋の労働、鉱山労働、紡績労働、画家の労働等々の交換であるからといって、長靴の価値は画家の労働によつて最も正しく評価されるであろうか。フランクリンは逆に、長靴、鉱産物、紡糸、絵画等々の価値は、なんら特殊な質をもたない、したがってたんなる量によって測ることのできる抽象的労働によって規定される、と考えたのである。

しかし彼は、交換価値にふくまれている労働を、抽象的一般的労働、個人的労働の全面的外化から生じる社会的労働として展開しなかったから、必然的に、この外化した労働の直接的存在形態である貨幣を誤解した。だから彼にとっては、貨幣と交換価値を生みだす労働とは、なんら内面的な関連をもたず、貨幣はむしろ、技術的な便宜のために交換のなかへ外からもちこまれた用具なのである。

フランクリンの交換価値の分析は、経済学の一般的歩みにたいしては、直接の影響をあたえないままにとどまった。なぜならば、彼はただ経済学の個々の問題を一定の実際の機会にさいして取り扱ったにすぎなかったからである。

現実的有用労働と交換価値を生みだす労働とのあいだの対立は、どんな特殊な種類の現実的労働がブルジョア富の源泉であるか、という問題のかたちで、18世紀中、ヨーロッパを騒がせた。だから使用価値に実現される、あるいは生産物を供給するなどの労働も、ただそれだけの理由でただちに富をつくりだすものではない、ということが前提されていた。けれども重農主義者たちにとっては、その論敵にとつてと同じく、焦眉の論点は、どのような労働が価値を創造するかということではなく、どのような労働が剰余価値を創造するかということである。だから、すべての科学の歴更上のあゆみがいくたの紆余曲折を経てはじめてほんとうの出発点にいたるように、彼らは問題をその原初的形態で解決してしまうよりまえに、これを複雑な形態で論じたのである。科学は、他の建築師と違って、ただ空中樓閣を描くばかりでなく、建物の礎石を据えるまえに、住居となるひとつひとつの階層をきづくのである。

われわれはここでは、これ以上重農主義者たちにとどまらないで、また多かれ少なかれ適切な思いつきで商品の正しい分析にふれている一連のイタリアの経済学者たちもすべて見おくって、ただちに、ブルジョア経済学の全体系をつくりあげた最初のイギリス人、サー・ジェームズ・ステュアートにむかおう。

彼にあつては、経済学の抽象的諸範疇は、まだその素材的内容から分離する過程にあり、したがってあいまいで動揺して現われているが、交換価値という範疇もそうである。ある個所では、彼は、現実価値を労働時間（一人の労働者が一日のうちになしうるもの [what a workman can perform in a day]）によって規定しているが、しかしこれとならんで賃金 (Salair) と原料とが一役を演じて混乱をまねいている。他のある個所では、素材的内容との格闘がさらにはっきりと現われている。彼は、ある商品にふくまれている自然的材料、たとえば銀製の編細工中の銀をその内在的価値 (intrinsic worth) とよび、他方では商品にふくまれている労働時間をその使用価値 (useful value) とよんでいる、

*ステュアートの著作「経済学原理の研究、自由諸国民国内政策学にかんする試論」は、1767年ロンドンではじめて刊行されたが、アダム・スミスの「諸国民の富」の10年まえであった。

彼は言う「前者はそれ自体で現実のものであるが・・・これとは反対に使用価値は、それを生産するためについやされた労働にしたがって評価されなければならない。素材の変形に用いられる労働は、ある人の時間の一部を代表している、うんぬん。」

ステュアートが彼の先行者や後継者より抜きんでていた点は、交換価値にあらわされる独特な社会的労働と使用価値を目的とする現実的労働とをはっきり区別したことである。彼は言う。「その譲渡 (alienation) によって一般的等価物 (uni versal equivalent) を創造する労働を、私は勤労とよぶ。」彼は、勤労としての労働を現実的労働から区別するだけでなく、労働の他の社会的形態からも区別する。彼にとっては、それは、労働の古代的および中世的形態に対立する労働のブルジョアの形態である。彼がとくに関心をよせたのは、ブルジョアの労働と封建的労働との対立であつて、彼は、没落の段階にあるこの封建的労働を祖国スコットランドでも、また彼の広範囲の大陸旅行でも観察していた。もちろんステュアートは、ブルジョア時代以前の時代でも生産物は商品の形態をとり、商品は貨幣の形態をとることをよく知っていたが、しかし彼は、富の元素的基礎形態としての商品と、取得の支配的形態としての譲渡 (Enitaube・rung) とは、ブルジョアの生産時代にだけ属するものであり、したがって交換価値を生みだす労働の性格は、独特なブルジョア的なものであることを詳しく証明している。

農業、製造工業、海運業、商業等々のような現実的労働の特殊な諸形態を、つぎつぎに富の真の源泉であると主張してから、アダム・スミスは、労働一般が、しかもその社会的総姿態での、分業としての労働一般が、素材的富つまり諸使用価値の唯一の源泉であると宣言した。そのさいに、彼は自然要素をまったく見すごしたものだから、彼はもっぱら社会的な富の、交換価値の領域に通いこまれることとなった。

たしかにアダムは、商品の価値をそれにふくまれている、労働時間によって規定しはするが、そのあとでふたたびこの価値規定の現実性をアダム以前の時代へ追いもどしている。言いかえれば、彼にとって単純商品の立場では真実だと思われることが、単純商品に代わって、資本、賃労働、地代等々のいっそう商度で複雑な諸形態が現われてくるやいなや、彼にははっきりしなくなるのである。

このことを彼はこう表現する。すなわち、商品の価値がそれにふくまれている労働時間によって測られたのは、人間がまだ資本家、賃労働者、土地所有者、借地農業者、高利貸等々としてではなく、ただ単純な商品生産者および商品交換者として相対していたにすぎなかった市民階級の失われた楽園 [Paradise lost] においてである、と。

彼は、商品の価値がそれにふくまれている労働時間によって規定されるということ、商品の価値が労働の価値によって規定されるということとたえず混同し、詳細な論究ではいたるところで動揺しており、そして社会的過程が等しくない労働のあいだで強制的になしとげる客観的な均等化を、個人的労働の主観的同権化と誤認している。

彼は、現実的労働から交換価値を生み出す労働、すなわちブルジョアの労働の基本形態への移行を分業によってなしとげようと試みている。ところで、私的変換が分業を前提とするというのは正しいが、分業が私的交換を前提とするというのは誤りである。たとえばペルー人のあいだでは、私的変換、商品としての生産物の交換はおこなわれなかったが、分業は極度におこなわれていたのである。

*たとえば、アダム・スミスはこう言っている。「労働の等しい最はいつでもどんなところでも、労働する者にとって等しい価値をもつと言ってよいであろう。健康、体力、気力が普通の状態にあり、熟練と技巧の程度が普通であれば、彼はいつも同一量の安息、自由、幸福を犠牲にしなければならない。彼が支払う価格は、彼が労働の報酬として受け取る商品の量がどうであろうと、いつも同一であるにちがいない。その労働か買うことのできる財貨は、実際のところ、あるときは多く、あるときは少ないであろうが、変動するのはそれらの財貨の価値であって、それらを買う労働の価値ではない。……だから労働だけがそれぞれ自身の価値をけって変えない。……だから労働は商品の真実価格である、うんぬん。」

[諸国民の富第一編第五章。邦訳、大内兵新・松川七郎訳岩波文庫(一)155～156頁]。

アダム・スミスとは反対に、デーヴィッド・リカードは、労働時間による商品価値の規定を純粹に引き出し、この法則が、それと表面上最も矛盾するブルジョア的生産諸関係をも支配することを示した。リカードの研究はもっぱら価値の大きさに限られていて、これに関する限り、彼はこの法則の実現が一定の歴史的諸前提に依存していることに、すくなくとも感づいている。

すなわち彼は、労働時間による価値の大きさの規定は、「勤労によって任意に増加される、そしてそれらの生産が無制限な競争によって支配されている」商品だけに妥当する、と首つている。

*デーヴィッド・リカード「経済学および課税の原理」ロンドン 1821年 岩波文庫上巻 15頁

このことは事実上、価値法則はその完全な展開のためには、大工業生産と自由競争との社会、すなわち近代ブルジョア社会を前提する、ということの意味するものにはかならない。そのほかの点では、リカードは、労働のブルジョアの形態を社会的労働の永遠の自然形態だとみなしている。

シスモンディは、リカードとの直接の論争で、交換価値を生む労働の独特な社会的性格を強調するとともに、価値の大きさを必要労働時間に還元すること、「全社会の需要とこの需要をみたすにたりる労働量とのあいだの割合」に還元することを、「われわれの経済的進歩の性格」とよんでいる。

*シスモンディ「経済学研究」第二巻 1838年「商業はすべてのものを使用価値と交換価値との対立に帰着させた」

シスモンディはもはや、交換価値を生む労働が貨幣によって不純にされるというボアギュベールの考えにはとらわれていないが、ボアギュベールが貨幣を非難したように、大産業資本を非難している。リカードにおいて、経済学が容赦することなくその最後の結論を引き出し、それでもって終わりをつげたとすれば、シスモンディは、経済学の自分自身にたいする疑惑を示すことによって、この終結を補完しているのである。

リカードは 古典派経済学の完成者として、労働時間による交換価値の規定を最も純粹に定式化し展開したのであるから、経済学の側から起こされた論争は、当然彼に集中された。この論争から大部分ばかげている形態を取り去ると、それは次の諸点に要約される。

第一。労働自身が交換価値をもっており、異なる労働は異なる交換価値をもっている。交換価値を交換価値の尺度にするのは悪循環である。なぜならば、測る交換価値自体がさらにまた尺度を必要とするのだから。この異論は、労働時間が交換価値の内在的尺度としてあたえられていて、その基礎のうえで労賃を展開する、という問題に帰着する。賃労働の理論がこれに解答をあたえる。

第二。もしある生産物の交換価値がそれにふくまれている労働時間に等しいならば、一労働日の交換価値はその生産物に等しい。言いかえれば、労賃は労働の生産物に等しくなければならない。ところが、事実は逆である。だから[Ergo] うんぬん。この異論は、たんに労働時間だけによって規定される交換価値を基礎としてどうして生産から労働の交換価値がその生産物の交換価値よりも小さいという結果が生まれるのか、という問題に帰着する。われわれは、この問題を資本を考察するさいに解決する。

第三。商品の市場価格は、需要と供給との関係が変動するにつれて、その交換価値以下に下がったり、それ以上にあがったりする。だから商品の交換価値は、需要と供給の関係によって規定されているのであって、それにふくまれている労働時間によって規定されているのではない。じっさい、この奇妙な推論では、交換価値の基礎のうえでそれと異なる市場価格がどうして展開されるのか、という問題が提起されるだけである。この問題は競争論で解決される。

第四。最後の反対論、しかももしいつものように奇妙な実例のかたちでもちだされさしななければ、一見したところ最も痛烈な反対論は、もし交換価値が商品にふくまれている労働時間にほかならないとすれば、すこしも労働をふくまない商品は どうして交換価値をもつことができるのか、言いかえるならば、たんなる自然力の交換価値はどこから生じるのか、というものである。この問題は地代論で解決される。